

2018年5月24日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 苦のもととは執着

### 1. 概要

#### (1) 資料

増谷文雄著『阿含経典1』ちくま学芸文庫／存在の法則（縁起）に関する経典群／因縁相応／34結縛（けつばく）

#### (2) 主題

五支縁起を通して、執着が苦悩を生み出すことについて、学んでみたいと思います。

### 2. 結縛

#### (1) 経文「結縛」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティー（舎衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

その時、世尊は、比丘たちに説いて、かように仰せられた。

「比丘たちよ、繫縛（けばく）するものをじっと味いながら観じていると、その人には愛著の念がいやましてくる」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.236）

#### (2) 愛著が深まる

「愛著（あいじゃく）」は「渴愛（かつあい）」とも言い、激しく執着することです。

「繫縛（けばく）」は「縛られ繋がれること」で、「執着して離れられなくなります」ことです。

繫縛するものから得られる快さに心を奪われていると、愛著（渴愛）が深まってくると、経文にあります。

#### (3) 悪循環

感官の対象による快さを味わいますと、そこに執着が生まれます。

執着の対象による快さを味わい続けると、そこから離れられなくなります。繫縛です。

繫縛によって、さらに執着が深まります。愛著です。

愛著の対象による快さを味わい続けますと、ますます離れられなくなります。繫縛が深まるのです。

繫縛と愛著は、互いに原因となり結果となって、深まり続けます。この悪循環は、際限がありません。

#### 4. 五支縁起

##### (1) 経文「結縛」

「その愛によって取がある、取によって有がある、有によって生がある。生によって老死・愁・悲・苦・憂・悩が生ずる。かくのごときが、このすべての苦の集積の生ずる所以である」

(増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.233)

##### (2) 五支縁起

ここに、五支の流転縁起が語られています。

愛があるから取がある

取があるから有がある

有があるから生がある

生があるから老死・愁・悲・苦・憂・悩がある

##### (3) すべての苦の集積

経文に「すべての苦の集積が生じる」とあります。我が身にたくさんの苦が生じることを、苦の集積と言っているのでしょうか。これらの苦のすべてが、五支の流転縁起によって生じるのです。

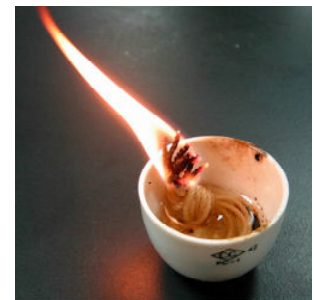
#### 5. 燈火の譬え

##### (1) 経文「結縛」

「比丘たちよ、それは、たとえば、ここに燈火があって、油と燈心によって燃えているとする。そして、その時、人があって、時を見はからって、それに油をそそぎ、燈心をかきたてたとするならば、どうであろうか。比丘たちよ、そうすれば、その油燈は、それによって、長時間にわたり、久しくもえつづけるであろう」 (増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.236)

##### (2) 燈火がもえつづける

油燈は、油を燈心にしみこませて火を付け、明かりとするものです。油が少なくなったら注ぎ足します。燈心が短くなったら油に浸っている燈心を掻き出します。こうすれば、いつまでも燃え続けます。



災害時用の天ぷら油のランプ  
愛媛県総合科学博物館のウェブサイトから

#### 6. 苦悩が生じ続ける

##### (1) 経文「結縛」

「比丘たちよ、それとおなじように、繫縛するところのものを、じっと味いながら観ていると、しだいに愛著の念がいやましてくる。その愛によって取がある。取によって有がある。有によって生がある。生によって老死・愁・悲・苦・憂・悩が生ずる。かくのごときが、このすべての苦の集積の生ずる所以である」 (増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.236~237)

## (2) 苦が生じ続ける

油燈に注ぐ油、かきたてる芯は、執着の対象と、それによって味わう快さです。この快さに心を奪われ続けていると、あたかも炎が燃え続けるように渴愛が生じ続けます。

渴愛が生じ続けるかぎり、五支の流転縁起によって、苦が生じ続けます。

## 7. 愛著が滅する

## (1) 経文「結縛」

「しかるに、比丘たちよ、繫縛するものを、これはいけないぞと観じていると、その人には、愛著の念が滅してくる。愛が滅すると取が滅する。取が滅すると有が滅する。有が滅すると生が滅する。生が滅すると老死・愁・悲・苦・憂・悩もまた滅する。かくのごときが、このすべての苦の集積の滅する所以である」（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.237）

## (2) 五支縁起（還滅縁起）

ここに五支の還滅縁起が語られています。

愛が滅すると取が滅する

取が滅すると有が滅する

有が滅すると生が滅する

生が滅すると老死・愁・悲・苦・憂・悩が滅する

## (3) これはいけないぞ

## ① 「これはいけないぞと観じる」とあります。

なんらかの対象に執着して離れられなくなっている自分に気づき、このままではいけないという思いで自分を観察します。そして、繫縛するものから遠ざかるように気をつけます。遠ざかれないときには繫縛するものから得られる快さに心を奪われないように気をつけます。

このように気をつけていると、愛著が消えていきます。

## ② これは、自分本位の感情に支配されていた生きかたから、正しい知性で自分をコントロールする生き方に方向転換することを意味します。煩惱の人生から智慧の人生への転換です。

## 8. 燈火が消える

## (1) 経文「結縛」

比丘たちよ、それは、たとえば、ここに燈火があって、油と燈心によって燃えているとする。

だが、その時、誰も、時を見はからって、それに油をそそぎ、燈心をかきたてなかったとするならば、どうであろうか。比丘たちよ、そうすると、その油燈は、やがてさきの油は尽き、新しい燃料は加えられないということで、消えてしまうであろう」

## (2) 燈火が消える

油燈に新しい油をそそがず、燈心が燃え落ちても油に浸った燈心を掻き出すこともしなかったら、火は消えてしまいます。

## 9. 苦が滅する

## (1) 経文「結縛」

「比丘たちよ、それとおなじく、繫縛するところのものを、これはいけないぞと観ていると、その人には、いつか、愛著の念がなくなってくる。愛が滅すると取が滅する。取が滅すると有が滅する。有が滅すると生が滅する。生が滅すると、老死・愁・悲・苦・憂・悩もまた滅する。かくのごときが、このすべての苦の集積の滅する所以である」

(増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.237)

## (2) すべての苦が滅する

経文に「すべての苦の集積が滅する」とあります。

渴愛が滅すれば、我が身に起きていた苦がすっかり消滅し、再び生じることがないのです。

## 10. 愛

ここから、五つの縁起支について、若干の考察を試みたいと思います。

前回学びました「分別」と題する経文から該当部分を抽出して、少しだけ掘り下げて見たいと思います。

## (1) 経文「分別」

比丘たちよ、では、愛（渴愛）とはなんだろうか。比丘たちよ、それには六つの渴愛がある。物にたいする渴愛、声にたいする渴愛、香にたいする渴愛、味にたいする渴愛、感触にたいする渴愛、法にたいする渴愛がそれである。比丘たちよ、それを愛というのである。

(増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.131)

## (2) 渴愛

① 六つの感官（眼・耳・鼻・舌・身・意）のそれぞれに、その対象に対する渴愛が生じます。

感官の対象から得られる快さに心を奪われていると、愛著（渴愛）が生じます。

② どのような事象から、どのような快さを得て心を奪われるか、そこからどのような愛著（渴愛）が生じるかは、それぞれの人と場合によります。

## (3) 心を奪われない

感官の対象から得られる快さに心を奪われなければ、愛著（渴愛）は生じません。いつとき快さを楽しみ、すぐに忘れれば、愛著（渴愛）は生じないのです。

## 1.1. 取

### (1) 経文「分別」

比丘たちよ、また、取（取著）とはなんであろうか。比丘たちよ、それには四つの取著がある。欲にたいする取著、見（所見）にたいする取著、戒（戒禁）にたいする取著、我にたいする取著がそれである。比丘たちよ、これを取というのである。

（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.130~131）

### (2) 愛があるから取がある

経文に「愛があるから取がある」とあります。執着の感情である愛著（渴愛）が生じますと、そこからより具体的な取著の動きが出てくるということでありましょう。

### (3) 結縛

経題の「結縛」は、取著のことだと考えられます。取著があると釈迦牟尼世尊の教えを正しく学ぶことができず、正しく実践することができなくなるので、苦から解脱ができなくなるのです。

### (4) 欲に対する取著

欲望に執着するということです。欲望にしがみつくわけですから、もっと欲しい、もっと欲しいと際限がなくなります。

財産に対する欲望、性的な欲望、飲食に関する欲望、社会的な欲望、睡眠に関する欲望を五欲といいます。こうした欲望にしがみつき、どこまでも求め続けるのです。このような具体的で底深い欲望を貪欲というのでありましょう。

### (4) 見（所見）に対する取著

ものの見方、考え方に執着するということです。

自分の見方、考え方がもっとも正しいと思い込み、しがみつきます。

一度執着すると、間違っていると分かっていても捨てることができません。正しい見方、考え方はねつけ、誤った見方、考えかたを頑なに押し通します。

### (5) 戒（戒禁）に対する取著

① 「戒」とは「すべきこと」、「禁」は「禁戒」で「してはならないこと」。

「こうしななければならない（戒）」と頑なに執着し、「こうしてはならない（禁戒）」と頑なに執着することを「戒禁取（かいごんしゅ）」と言います。

② 「こうしななければならない」「こうしてはならない」というような定めに執着しますと、心に柔軟性がなくなります。

人の意見を受け付けません。行動にもそうした頑なさが現れます。

このような人が釈迦牟尼世尊の教えに接しても、正しく理解することができません。このため、苦悩から解脱することができなくなります。

## (6) 我に対する取著

- ① 「本来の自分」を知らないために、「自分に対する誤った認識」を持ちます。これが「我」です。「我に対する取著」とは、「自分に対する誤った認識」に執着することです。
- ② 阿含経は、次のような「我（自分に対する誤った認識）」について述べています。「これは」とは、「心・身・環境」を指しています。
- これはわが所有（もの）である
- これはわが我（が）である
- これはわが本体である
- ③ 庭野日敬師は、次のように述べています。

「人間の不幸のおおもとは、『肉体だけが自分である』とおもいこんでいることです。この肉体へのとらわれがあるかぎり、なによりも自分の肉体を維持し、満足させることを第一に考え、ほかの人のことなど二の次になりますから、つい奪いあいや足のひっぱりあいなどの争いが起こり、したがって不安・悩み・苦しみなどの絶えることがないのです」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p.188）

## 12. 有

## (1) 経文「分別」

また、比丘たちよ、有（存在）とはなんであろうか。比丘たちよ、それには三つの存在がある。欲界すなわち欲望の世界における存在と、色界すなわち物質の世界における存在と、無色界すなわち抽象の世界における存在である。比丘たちよ、これを有というのである。

（増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.130）

## (2) 存在

「有（存在）」とは、生存の領域と生存の状態ということのようです。「このような環境で、このように生きている」ということだと思われれます。

## (3) 三界

欲界・色界・無色界を、三界と言い、それぞれ次のような世界とされています。

欲界：一番下にある世界。このなかに地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道がある。

色界：欲界の上にある。欲を離れた清らかな世界。

無色界：最上の世界。高度の精神世界。

このうち、「色界」「無色界」は、古代インドにおける神話の世界のようですが、仏教においては瞑想の境地として説明されています。今回は深入りしないでおきます。いずれにしても迷いの世界です。

(4) 取によって有がある

経文「結縛」に、「取によって有がある」とあります。取著の行為を繰り返す人は、迷いの三界に堕ち込み、抜け出すことができないのです。

(5) 五下分結

人を欲界に結びつける結縛として、五下分結(ごげぶんけつ)といわれる迷いがあります。これらの迷いがあるかぎり、欲界の六道輪廻に堕ちこみ、抜け出すことができません。

有身見：我に対する取著に相当します	} この三つを「三結」と言います
疑　　：見（所見）に対する取著に相当します	
戒禁取：戒禁に対する取著です	
貪欲　：欲に対する取著に相当します	
瞋恚　：自分本位のわがままな怒りです	

1 3. 生

(1) 経文「分別」

また、比丘たちよ、生とはなんであろうか。生きとし生けるものが、生まれて、身体の各部あられ、手足そのところをえたる、比丘たちよ、これを生というのである。

(増谷文雄編訳『阿含経典1』ちくま学芸文庫、p.130)

(2) 誕生

ここには、人の誕生の様子が述べられています。

誕生するとは、人間を構成する五つの要素（色・受・想・行・識）が揃い、六つの感官（眼・耳・鼻・舌・身・意）が働きだすことです。

これを拡大解釈すれば、人間形成、人格形成を表していると受け取ることもできます。

(3) 人生

「生」と「老死」の間には、乳児・幼児・児童・少年（少女）・青年・壮年などの年齢段階があります。縁起説には、この間が表現されていません。

私は、「生」がこれらの年齢段階を含んでいると解釈しています。

(4) 有によって生がある

「迷いの世界で迷いの日々を送る状態（有）」から抜け出すことができなければ、迷っているままの乳児・幼児・児童・少年（少女）・青年・壮年・老年であり続けることとなります。

このことを、経文「結縛」は、「有によって生がある」と言っているのでありましょう。

## 1.4. 老死

### (1) 経文「分別」

では、比丘たちよ、老死とはなんであろうか。生きとし生けるものが、老い衰え、朽ちやぶれ、髪しろく、皺(しわ)生じて、齢(よわい)かたむき、諸根やつれたる、これを老というのである。また、生きとし生けるものが、命おわり、息絶え、身軀やぶれて、死して遺骸となり、棄てられたる、これを死というのである。かくのごとく、この老いとこの死とを、比丘たちよ、老死というのである。(増谷文雄編訳『阿含經典1』ちくま学芸文庫、p.130)

### (2) 衰え

ここには「老い衰え、朽ちやぶれ、髪しろく、皺生じて、齢かたむき、諸根やつれたる」と人が衰えていく様子が描かれています。

ここに「諸根やつれたる」とあります。「諸根」には、肉体的要素と精神的要素があります。身も心も老い衰えると言っているわけです。

### (3) 精神的な老い衰え

肉体的に老い衰えても、精神的に老い衰える必要はないのですが、肉体と共に精神も衰えて行く人が多いように思われます。

若いころから精神的に老い衰えている人が少なくないという見方もあります。若い肉体におおわれていた精神的な老いが、肉体の老いと共に表面化するということがあるのかもしれませんが。

### (4) 死

ここには「命おわり、息絶え、身軀やぶれて、死して遺骸となり、棄てられたる」とあります。愛著(渴愛)の人生を送ってきたために、周囲の人びとから疎まれていたような人は、死して後も疎まれ続けることとなるでしょう。この表現には、そのようなニュアンスを感じます。

### (5) 愁・悲・苦・憂・悩

経文「結縛」には、「老死・愁・悲・苦・憂・悩」とあります。

生から老いにいたり死を迎えるまでの人生が、愁・悲・苦・憂・悩に満ちていると言っているのでありましょう。

なお「愁・悲・苦・憂・悩」は、他の経文で「嘆き、悲しみ、苦しみ、憂い、悩み」と表現されていました。

### (6) 生によって老死がある

経文「結縛」に、「生によって老死がある」とあります。生まれてきた者は、やがて老い、死を迎えます。

「生・老・死」は、だれも避けることはできないのですが、正しく対処することができず、いたずらに苦悩する人が多いのは、やはり、執着(渴愛)を深めているからでありましょう。



## 1 5. 「五支縁起」の教え

### (1) 愛著と苦悩

経文「結縛」にある「すべての苦の集積」は、「人生上の苦悩のすべて」であり、五支縁起における「老死・愁・悲・苦・憂・悩」がそれにあたるのであります。

五支の流転縁起では、「人生上の苦悩のすべて」は「愛著（渴愛）」から生じていると説き、還滅縁起では「愛著（渴愛）」を捨てれば「苦悩のない人生を営むことができる」と説いています。

### (2) 八支の聖道

「愛著（渴愛）」を滅する道が「八支の聖道」であることは、「四つの聖諦」における「苦の滅にいたる道の聖諦」で明らかにされています。